

主 題：主は喜んでおられるか

聖書箇所：テサロニケ人への手紙 第一 1章2-3節

今日のメッセージのタイトルは「主は喜んでおられるか？」です。あなたのことを知っておられる主なる神はあなたのことを喜んでおられるかどうか？あなたのその信仰の歩みを主は喜んでおられるのかどうか？そのことを今日、私たちはごいっしょにこのみことばを通して学んで行きます。というのは、私たち信仰者が一番望んでいること、それは私たちの神に喜んでいただくことだからです。私たちがこの主の前に立つときに「良くやった！あなたは信仰者として成すべきことをなして来た。」と主が喜んでくださる、そのことを私たちは願いながら今日を生きる訳です。主が喜んでくださる者として歩んで行きたい、主が喜んでくださる者として成長して行きたいと。パウロはこのように言っています。Ⅱコリント5：9「そういうわけで、肉体の中にあると、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」と、パウロはそのように生きたのです。神に喜んでいただきたい、私は神が喜ばれることをして行きたいと、なぜ、彼はそのように望んだのでしょうか？皆さんはお分かりですね？あなたが主に喜ばれることを為して行くなら、この主のすばらしい栄光があなたを通して現わされて行くからです。神のすばらしい栄光があなたを通して現わされて行くためには、あなたが主に喜ばれていることが必要です。ですから、パウロはそのことを望んで、そのことを目標に生きたのです。彼が考えていたことは、私の為すことすべてにおいて神に喜んでいただきたいと、そのことを考え、その考えに基づいてすべてのことを選択したのです。

信仰者の皆さん、あなたはどのように生きていますか？私たちが主イエス・キリストの前に立つときに、主はあなたのことを喜んでくださるかどうか？それはすべて、今日私たちがどう生きるかにかかっています。ですから、私たちはどのように生きていくべきなのか、どのように生きることが神に喜ばれることなのか、そのことをしっかりと覚えることが必要です。「これだけのことをしたから、きっと神は喜んでくださる…。」、果たしてそうでしょうか？本当に神が喜んでくださる生き方とは、どのような生き方なのでしょう？そのことを今日、私たちはこのみことばを通してごいっしょに見て行きます。

パウロはこのように言います。「テサロニケのクリスチャンたちは主に喜ばれる者たちであった。」とⅠテサロニケ4：1でこのように言っています。「終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いままあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。」と。パウロがテサロニケのクリスチャンたちのことを考えるたびに思ったことは、彼らは間違いなく神に喜ばれる生き方をしていることだったのです。思い出してください。パウロはこのテサロニケの町でイエス・キリストのことを宣べ伝えました。ところが、ユダヤ人からの迫害によって彼らはテサロニケを追い出されて行きます。ベレヤという町に移動しました。その後パウロは、アテネへ、そしてコリントへと移動して行くのです。

パウロはテサロニケのクリスチャンのことが気になって仕方なかったのです。そこでテモテを送りました。コリントの町にいたパウロの所にテモテが戻って来るのです。そして、テモテはすばらしい知らせを教えてくれる訳です。テサロニケのクリスチャンたちは神に喜ばれる歩みをしていると、そのニュースはどれ程パウロの心を励まし、パウロの心を勇気づけ喜ばせたか、想像がつかず。そこでパウロはこの手紙を送る訳です。ですから、この手紙を見ると、テサロニケの教会の人たちがどのような状態にあったのか、そのことを見て取る事が出来ます。

主に喜ばれる生き方をしていたテサロニケのクリスチャンたち、彼らの歩みがこの1章3節に三つのことばで表わされています。神に喜ばれる生活をしていた彼らの特徴が三つ、ここに記されています。一つ目は「信仰の働き」であり、二つ目は「愛の労苦」であり、そして、三つ目は「望みの忍耐」です。これがテサロニケのクリスチャンたちの特徴であり、これが神に喜ばれる人たちの特徴なのです。パウロは具体的にどのようなことを言っているのか、神に喜ばれる人々とはどういう人々なのか？この3節からごいっしょに学んでまいりましょう。

Ⅰテサロニケ1：3「絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。」、パウロは彼らのことをいつも祈りの度に思い出していたのです。祈る度にこのテサロニケのクリスチャンたちのことが、いつも彼の脳裏に浮かんできました。彼らのことを神に感謝しています。というのは、彼らのその生き様というのをパウロがいつも思い出していたからです。私たちもそうしますね。私たちとつながりができたいろいろな人たちのために、私たちはとりなしの祈りをします。願うことは彼らの信仰が成長することです。彼らがクリスチャンと

して成長して行くこと、また、彼らがこの救いに与ることです。パウロはテサロニケの人々が成長していることを喜び、祈りの度に彼らのことを神に感謝しているのです。

4節を見ると、「神に愛されている兄弟たち。あなたがたが神に選ばれた者であることは私たちが知っています。」とあります。つまり、パウロはこの三つの特徴は、神に喜ばれる者たちの特徴というだけでなく、救われている人々の特徴だと言うのです。イエスを信じている人たちはこのような人として生きているし、このような人として成長する人たちです。信仰において、愛において、希望において…。その人のうちでその信仰は生きているし、その人たちのうちでこの愛は成長しているし、その人のうちでこの希望はますます強められているのです。そのニュースを聞いたときにパウロは、彼らは間違いなく救われている、そして、救われているだけでなく、彼らは神に喜ばれる者として歩んでいると確信するのです。

★テサロニケのクリスチャンたちの三つの特徴

A. 信仰の働き

1. 本物の信仰は人を変える

信仰の働きは、信仰がもたらす働きのことです。本当の信仰というのは、いろんな働きを生み出して行くものです。私たちがイエスを信じたとき、正確に言えば、神が私たちを救ってくださったときに、私たちの生き方は変わって行きます。このⅠテサロニケ1：9でも、テサロニケのクリスチャンに関してパウロはこのように言っています。「私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、」と、このような変化がテサロニケのクリスチャンたちの中に起こったのです。これまで偶像に仕えて来た者が、まことの生ける神に仕える者となった、これが救いなのです。

パウロのことを思い出してください。パウロはダマスコに行こうとしていました。ダマスコに行こうとしたその目的は、ダマスコに行って、そこにいるクリスチャンたちを捕らえて彼らを迫害することでした。そのために彼はダマスコに向かっていました。「使徒の働き」の9章に記されていますが、その途中で、彼は復活のイエス・キリストに出会ったのです。そして、パウロは神から救いをいただいたのです。非常に興味深いことは、ダマスコに着いたパウロに大きな変化が起こったことです。それは、パウロが「イエスは神の子である。」と伝え始めたことです。これまでイエスを信じる者たちを迫害していた者が、イエス・キリストが神であり、イエス・キリストが救い主であるということを伝え始めたのです。ですから、みことばが教えるように、ダマスコに住むユダヤ人たちは「うろたえた」とあります。クリスチャンたちも最初は信用出来なかった。なぜなら、「彼は我々を捕らえるためにダマスコに来たのでしょうか？信用出来るかどうか？」と。でも、その後には彼らはこのパウロを受け入れて行きます。というのは、彼の信仰が本物であることを人々が確信するからです。彼の生き方は変わったのです。キリストに逆らっていた者、キリストに反対していた者が、キリストを愛しキリストに仕える者と変わったのです。まさに、テサロニケのクリスチャンたちのように、偶像に仕えていた者、つまり、神でないものを神として仕えてきた者が、まことの神を信じ、その方に仕える者と生まれ変わったのです。これが救いです。救いは人を変えます。

2. 本物の信仰には行ないが伴う

パウロは彼らの信仰が本物だと言いました。その証拠があります。1：8を見ると「主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。」と、テサロニケのクリスチャンたちの信仰は周りの国々の人々に届いたのです。彼らのうちに為されている神のみわざが、人々のところに届いて行ったのです。なぜなら、彼らの信仰は生きていたからです。ですから、周りの人々がそのことを聞いて、そして、その神を崇めるのです。

また、Ⅱテサロニケ1：3には「兄弟たち。あなたがたのことについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。そうするのが当然なのです。なぜならあなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです。」とあります。「あなたがたの信仰が目に見えて成長」しているから、パウロは神に感謝しなければいけないと言うのです。どうしてそのことが分かったのでしょうか？彼らの生き方が変わったからです。神に喜ばれる行ないが彼らから出て来ています。ですから、本物の信仰は、人を変え、その人の行ないを変えるのです。

なぜなら、皆さんがよくご存じのように、救いは神からの贈り物だからです。覚えていますか？エペソ2：8に「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」とあり、みことばが教えていることは、救いは神が私たちに与えてくださる贈り物、ギフトであるということです。ですから、続いて9節に「行ないによるものではありません。だれも誇ることをないためです。」とあります。ですから、どんなに良い働きも、良い行ないも、罪人に救いをもたらすことはできないのです。人々に感銘を与えるようなどんなに良い働きをしたとしても、どんな

に良い人間になろうと一生懸命努力をしたとしても、どのような行ないも罪人であるあなたをその罪から救い出すことはできません。救いは神から与えられるものです。救いは神の贈り物なのです。ですから、神が私たちのうちに働いたら、その神の働きが継続して私たちのうちに為されて行くのです。ですから、このエペソ2：10には「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。」と記されています。みことばは明確です。良い行ないによっては救われません。しかし、救われた人には良い行ないが生まれて来るのです。だから、続けてパウロはこう言います。

「神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」と、救われた者たちが良い行ないを為して行くように、神が私たちのうちに働いてくださっているのです。

明確ですね。神が救ってくださった人は生き方が変わって行きます。その人のうちには新しい行ないが出て来ます。もちろん、私たちは完璧ではありません。罪を犯さない人間ではないのです。しかし、救われる前には神を喜ばせたいという思いは持っていませんから、私たちは好き勝手に生きていました。でも、イエスを信じた私たちは、失敗しながらでも、神に喜ばれることをしたいと願い、その神のみこころに従って生きて行こうとするのです。

ヤコブの手紙2：26でヤコブはこのように言っています。「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。」、肉体の死と霊的な死をこのように対比するのです。肉体的な死はからだたましいが分離することです。私たちは肉体的な死を迎えても肉体はまだこの地上に残ります。でも、たましいは主のもとに上がります。その状態を肉体的な死と言うのです。そこでヤコブが言うのです。「行ないのない信仰は、死んでいる」と、つまり、それは霊的な死だということ。なぜなら、本物の信仰には必ず行ないが伴っているからです。たましいとからだ分離している状態を肉体的な死というのなら、行ないと信仰が分離した場合、それは霊的な死だと言うのです。私たちがどれ程「イエスを信じている」とか「こういう祈りをした」と言っても、神があなたを救ってくださらなければ、あなたに変化は生まれて来ません。神があなたを救ってくださったら、神の働きが始まるのです。その働きがなければその霊的な状態は死んだままであると言うのです。

ヤコブはこのことを教えたときに、アブラハムという一人の人物の例えを用いています。彼の例を上げています。ヤコブ書2章21節に出て来るのですが、ヤコブはアブラハムのある一つの行為を上げています。自分の愛する子イサクをいけにえとしてささげようとしたときの事です。21-24節をご覧ください。「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。：22 あなたの見ておるとおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、」、もしかすると、ある人々は「この通り、聖書は行ないによって救われると記している。アブラハムもイサクをささげるといってその行為によって救いに与ったではないか！」と考える人がいるかもしれません。でも、そうではないのです。なぜなら、ヘブル人への手紙の著者が真っ向から否定しているからです。ヘブル11：17-19を見てください。著者は私たちにアブラハムがイサクをささげる行為について教えています。「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。：18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」と言われたのですが、：19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」、アブラハムは神からイサクをささげなさいという命令を受けました。でも、そのときはもうアブラハムは神を信じていました。そして、神から約束を受けていたのです。このイサクを通して子孫が増え広がるという約束です。ですから、アブラハムは考えたのです。神からこのような約束をいただいているが、今、「イサクを殺せ」という命令が来た、たとえ、ここでイサクを殺したとしても、神は必ずご自分が約束されたことを成就するために、イサクを死者からよみがえらせると。なぜなら、神は約束されたことは必ず守られる方だからです。アブラハムはこの様な信仰をすでに持っていたのです。この様な信仰を神に置いていたのです。イサクを殺しても神は必ず彼をよみがえらせて約束を成就なさると。

これは明らかに、アブラハム自身が救われていたことの証拠です。だから、彼はこの様に神に信頼を置いていたのです。この行為によって救われたのではありません。救われていることがこの行為によって明らかにされたのです。アブラハムは主を信じていたゆえに主の約束を信じたのです。そして、自分としては最悪と思えること、イサクを殺すことであっても、主のみこころだからと信じて彼は従って行くのです。これがアブラハムだったのです。今、ヘブル書をご覧くださいアブラハムの信仰について見えますが、もちろん、これはアブラハムだけでなく、この11章に出て来る信仰の勇者たち一人ひとりに共通していることです。信仰の勇者だったアブラハムの特徴が二つあります。

◎アブラハムの信仰

(1) 神を疑わない：11：8「信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けと

の召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。」、彼は主を疑うことをしないのです。聖書はこのように教えます。アブラハムは「主のみこころを知った」と、それは「出て行け」ということでした。ここから「出て行く」ことが神のみこころだと彼は確信したゆえに、「どこに行くのかを知らないで、」、でも、神が必ず導いてくれると言って出て行くのです。つまり、神のことを一度も疑っていません。普通なら、どこに行くのか聞きたいし、どれ位の道のりなのか、どんな環境なのか、そこは自分にとってプラスなのかどうかと考えてしまうところです。でも、アブラハムはそうはしなかった。「これが神のみこころだから行きます。どうなるか分からないけれど、神が導いてくれます。」と、みこころを示した神を疑うことなく、彼はそれに従って行こうとするのです。それは、アブラハムが主のみこころが自分にとって最善だと知っていたからです。そういう神でしょう、皆さん！！あなたもみこころを求めて生きるのなぜですか？主のみこころがあなたにとって最善だからです。いつもそれを邪魔するのはあなた自身の考えです。「こっちの方がベターだ。」と思ってしまうのです。

アブラハムは残念ながら、私たちのように神の完全な啓示を持っていませんでしたが、今私たちは、神のみこころを知ることができます。聖書にそれが書いてあるからです。この聖書の中に、私たちの神が何を望んでおられるのか、そのみこころが記されています。ですから、神のみこころを知ろうと思うなら、私たちはみことばをしっかりと見るのです。アブラハムは神のみこころが示されたときに、それに喜んで従おうとしました。それは自分にとって最善であるというだけでなく、そのみこころに従って行くときに、私たちが救われ、私たちが生かされている目的を達成することができることを知っているからです。つまり、神の栄光を現わすことができるのです。神の栄光を現わそうとするなら、私たちに必要なことは、この神のみこころに従って生きて行くことです。なぜなら、イエスはそのように生きられたからです。この地上にあって、父なる神のみこころに従って父なる神の栄光を現わして行かれました。同じことです。

神の栄光のために生きたいと願っておられる皆さん、それなら、あなたに必要なことは、神のみこころに従って生きて行くことです。別の言い方をすれば、神のみことばに従って生きて行くことです。その時にあなたは神の栄光を現わす者になります。ですから、みこころであると確信したときに、彼は疑っていません。確信を持って神に従い続けて行こうとしたのです。

(2) 神への信頼：11：9-10、彼はいつも主を信頼したのです。9節「**信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。**」、約束された地にやって来たのに、そこに待っていた生活は、他国人としての生活であり、天幕生活だったと言うのです。つまり、移動し続けたのです。そこに定住の場所はなかったのです。ひょっとしたらこのように思ったかもしれません。「約束が違うではないですか、神さま」と。「あなたが約束された地にやって来たのに、私はまだ外国人として天幕生活をしながら移動しています。なぜ、こんな生活なのですか？」と。でも、みことばはアブラハムは神を疑うことはなかったと教えています。

なぜなら、アブラハムは10節「**彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。**」と、つまり、アブラハムはもっとすばらしいところ、永遠を見ていたのです。この地上なんて一瞬の内に終わります。私たちは旅人です。AからBへ、BからCへと移動して行くのです。あっという間にこの地上での生活は終わります。そして、その後、私たちは永遠を迎えるのです。アブラハムはこの地上だけを見て歩んでいたのではないのです。彼は永遠を見ながらこの地上を生きただけです。だから、彼がしようとしたことは、地上でどんな成功を手にするのかではなくて、永遠に価値あることをして行こうということです。永遠に価値あるもののために今日を生きようとしたのです。それはどんなことですか？今日、神に喜ばれることをして行こうとすることです。自分のやりたいことではありません。神が喜んでくださることです。自分が最善だと思うことではないのです。神が最善だと言われることを実践しようとしたのです。なぜなら、その生き方こそが永遠に価値ある生き方だからです。

アブラハムは自分の思い通りに行かなくても見るべき所をしっかりと見ていました。自分の永遠を見て生きただけです。彼はどのような時でも主の約束を信頼したのです。というのは、「神は約束されたことを必ず成就なさる。約束を与えられた神に不可能なことは何一つない。」と、だから、この神に信頼を置いて生きただけです。これが生きた信仰なのです。どんなときにも私は主を信頼する、どんなときにも私は主に期待すると、そのような信仰者として彼は生きただけです。でも、このように生きたのは彼だけではありませんでした。このヘブル人への手紙11章33節から見て行くと、多くの信仰者がそのように生きたことが記されています。「**彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。**」、彼らは普通の人々でした。しかし、彼らは神を信頼して神のみこころに従い続けたのです。そうすると、神が彼らを用いたのです。これらのことを考えると興奮しませんか？な

げなら、今も同じ神があなたのうちに働いているからです。あなたが神を信頼して、神のみこころを行なっていくなら、神はあなたをご自身の目的に沿って使ってくださいます。

彼らはそのように生きました。それは大変でした。その後、35節から見て行くと「:35 女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。:36 また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、:37 また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、:38 ——この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。」とあります。しかし、彼らはしっかりと神を見上げて、その神に信頼を置いて歩み続けたのです。これが生きた信仰なのです。皆さんは、今もいろいろな所に置かれているでしょう。いろんな不安があるかもしれませんが、明日のことを考えると不安になるかも知れません。しかし、私たち信仰者はそのような中にあっても信頼することのできるお方がいるのです。私たちはこの神に信頼を置いて生きるのです。この全知全能の方に、明日のことを知っておられる方に、明後日のことを知っておられる方に、あなたの永遠を知っておられる方に私たちはすべてを託して生きることが出来るのです。確かに、からだは弱って行きます。問題は増えて行きます。私たちが耳にするニュース、また、読むニュースはある面で私たちの心を重くして行きます。しかし、私たちにはその中にあっても信頼出来る神がおられるのです。その方にすべてを委ねて今日を生きて行くのです。私の責任は今日神に喜ばれることをしながら、栄光を現わして行くこと、すべてのことは主の導きだからです。

テサロニケの人々はそのようにして生きていたのです。だから、パウロは言うのです、「彼らは確実に救われている。」と。そして、彼らは神に喜ばれていたのです。あなたはそのような信仰をもって生きていますか？信頼を置いて生きるに値する神です。すべて任せて歩んで行くことが出来る神です。なぜなら、この方はちゃんとあなたを捕え、そして、あなたを導いて行ってくださるからです。「心配するな！」と言ってくださる神、そのような方によって私たちは守られて、この地上を、そして、永遠をともしにするのです。

B. 愛の労苦

これも愛によって生み出された働きのことです。でも、「働き」とは教えていません。「労苦」と言っています。骨折りです。大変くたびれてしまう、額に汗をして疲れ切ってしまう、そのような状態です。愛を実践しようとしたときにそれがいかに難しいか、そのことは私たちはよく知っています。テサロニケのクリスチャンたちは愛を実践したのです。一生懸命実践したのです。

1. 兄弟姉妹への愛 : 彼らを愛する

◎神の命令である

主イエスが弟子たちにこんなことを言われました。ヨハネ13:34「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と、これが戒め、これが私の命令だと言うのです。信仰者の皆さん、イエスはその命令をあなたにくださったのです。このIテサロニケ4:9でパウロはこんなことをテサロニケの教会の人々に語っています。「兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです。」と、テサロニケのクリスチャンたちは「互いに愛し合う」ことを実践していたのです。パウロは言います。「それは神から教えられている」と、そうなのです。もし、私たちがそのことを望むなら神は私たちを助けてくださり、私たちがそのような人へと成長して行くために、神が私たちを助け導いて行ってくださるのです。IIテサロニケ1:3でも「兄弟たち。あなたがたのことについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。そうするのが当然なのです。なぜならあなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです。」とあります。

ですから、みことばが私たちに教えること、パウロがこのメッセージで教えてくれることは、このテサロニケの人々は兄弟姉妹を愛する愛において成長していたということです。神が彼らを助け、兄弟姉妹が兄弟姉妹を愛し合う者として成長するように助けてくれていた。そのことを知ってパウロは神に感謝をささげたのです。どうですか？信仰者の皆さん。神はあなたをこの教会に導いてくださった。すべての兄弟姉妹を愛していますか？もし、私たちの中に「愛したいけれど、どうしてもあの人とは…」という思いがあるなら、残念ながら、あなたのその選択を神は喜んでおられません。そして、もう一つ言うなら、もし、私たちがそのようにして神の戒めに逆らっているなら、神はあなたを祝福するだけでなく、神はあなたを周りの人々の祝福のために用いることができないのです。

神は私たちを祝福してくださっています。でも、その祝福を失うことはできます。もし、私たちが神の方を見ないで、私たちの思いに従って生きていくなら、私たちが神ではなくて罪を選択して生きてい

くなら、私たちは一瞬のうちに祝福を失ってしまいます。この群れから祝福を奪うような、そんな人になりたいと思いますか？神の祝福を奪ってしまうような、そんな人はどこにもいないはずです。それなら、主のみこころが何であるかを知った以上、私たちはそのような人に変えられて行くことを神に求め続けることが必要だと思いませんか？テサロニケのクリスチャンたちはそのようにして成長したのです。私たちも神の前に、私たちを変え続けてくださる神の前に自らをささげて、「神さま、私は愛において助けが必要です。このような人、あのような人がなかなか愛せないとするなら、神さま、どうぞ、私を変えてください。私はいったい何者なのでしょう？愛される資格のない私をここまで愛して下さった神が私のうちにいてくださる、その神の愛でもってあなたが望んでおられるように、兄弟姉妹を愛することができるように私を変えていってください。」と。私たちがそのようにしてこの愛において成長するように、私たちは神の前に助けを求め続けるのです。

◎兄弟姉妹を愛することに関して

この「愛」に関して四つのことをコメントさせてください。I テサロニケ5章に「兄弟姉妹を愛することに関して」パウロが四つのことを教えています。5：14－15「兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。：15 だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。」、ぜひ、注意して見てください。

(1) **気ままな者を戒め**＝兄弟姉妹が愛し合うのですが、もし、気ままな人がいるなら、その人を戒めることも私たちにとっての責任であり、愛だと言うのです。「気ままな者」とは「正しく歩んでない人」のことです。神のみこころに従って生きていない人に対しては、私たちが彼らを愛するゆえに、彼らを「戒めなさい」、「間違っている」と言いなさいと言うのです。それも神の教えです。

(2) **小心な者を励ます**＝道徳的、信仰的に弱い者を助け、彼らを支えて行くということです。教会の中で信仰的にまだ弱い人、そういう人たちを助けて行くという働きです。これは兄弟姉妹を愛するその愛の実践です。躓きになるのではなくて、彼らを励まして行き、みことばによって彼らがしっかり成長するように、先輩は後輩を導いて行くのです。信仰歴の長い人にはその責任があります。あなたはみことばをもって、そして、その生き方をもって、あなたの後続く者を助け導いて行くのです。彼らの成長のためです。

(3) **すべての人に寛容でありなさい**＝私たちが人々と接するとき、決して感情的、短気であってはならないのです。神の忍耐をいただいて接することです。

(4) **すべての人に善を行なう**＝15節、人の悪に対して悪で報いてはならないと言うのです。たとえ、人がどのようなことをして来たとしても、あなたの責任は常に神が喜ばれることをすること、それがあなたの責任です。明確です。これらのことを神が私たちに兄弟愛において成長するために、同時に忘れてはならないこととして教えているのです。

さて、この「愛の労苦」ということばを見たときに、パウロは彼らが愛ゆえにどのような労苦をしていたのか、詳しくは説明していません。ある人々は「病気の人や必要のある人々に愛を実践していたのではないか」と言います。また、ある人々は「テサロニケのクリスチャンたちは福音宣教を成すために、そこにはいろんな迫害が伴ったけれども、その中で、神を愛するゆえに一生懸命やって来たのだ」と言う人もいます。残念ながら、そのことは詳しく記されていません。でも、私たちが少なくとも「愛の労苦」に関して言えることは、愛と言ったときに私たちは今見て来たように、兄弟姉妹に対する愛とともに、神に対する愛のことを当然考えます。神に対する愛がなかったら兄弟姉妹に対する愛も出て来ないからです。神を愛するゆえに、そこからすべてのものが出て来るのです。間違いないことは、テサロニケのクリスチャンたちは兄弟姉妹を愛していましたが、それ以上に彼らは神を愛していたのです。ここにおられる信仰者の皆さんもそうだと思います。心から神を愛しておられることでしょうか。神を愛することに関して、幾つかのことを具体的に見て行きましょう。

2. 主への愛

神を愛する人たちは、

(1) **礼拝を優先**＝心から神を礼拝したい、神に賛美をささげたい、もちろん、毎日の生活がその通りですが、こうして、週の初めに、キリストの復活を記念して兄弟姉妹がともに集まるこの礼拝は、来ても来なくてもどちらでもいいというものではありません。私たちはこうして愛する兄弟姉妹たちといっしょになって主を崇めようと、私たちはこうして礼拝を優先するのです。私たちの優先順位の中でトップに入るのです。万難を排して私たちは集まり、兄弟姉妹がいっしょになってこの主を崇めるように。愛していることの証拠です。

(2) **伝道・宣教**＝私たちはイエス・キリストの福音を伝えて行こうとします。なぜなら、こんなにすばらしい神を知ったのですから、この方のことを人々に伝えて行きたい、こんなにすばらしい罪の完全

な赦しがあるのですから、それを伝えて行きたいと、そのように考えるのは当然です。神が備えてくださったこの救いを私たちは当然伝えたい、なぜなら、私たちはこの救いを備えてくれた神を愛しているからです。

(3) 教化＝同時に、兄弟姉妹が成長する教化もあります。もっとこの神をいっしょに知って、もっとこの神を愛する者として成長して行きたい、だから、神を愛するクリスチャンたちは、兄弟姉妹の信仰の成長のために喜んで労しようと思うのです。「私だけ成長したらいい」と言うのはおかしいですね。成長する人たちは、自分だけでなく周りの人たちのことにも目が行きます。教会を休んでいる人たちもいるし、病で来られない人もいます。そのような人たちをどのようにして励まして行くのか？当然、神を愛する人たちは、教化においても真剣に考える者たちです。

(4) 奉仕＝皆さんは一生懸命教会で奉仕しておられます。それも神に対する愛です。Ⅰコリント12章を開いてください。ここでパウロは、奉仕に関して大切なことをこのように教えてくれます。12:4「さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。」と、ここに「御霊の賜物」とあります。これは「恵み」という意味です。つまり、霊的な賜物というのは、神からあなたに与えられた恵みだと教えるのです。「霊的な御霊の賜物」というこの「賜物」はギリシャ語で「カリスマ」と言うのですが、そのことばの元になっているのは「恵み」です。神からあなたに与えられた恵み、それが霊的な賜物だということです。しかも、この賜物は何のために使われるのでしょうか？5節に「奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。」とあるように「奉仕」のためです。つまり、霊的な賜物は「仕える」ために与えられたものなのです。それは(a)人々が成長するために、そして、(b)教会の徳を高めて行くために与えられるのです。

ですから、少なくとも、私たちが覚えなければいけないことは、信仰者である皆さん、神はあなたに贈り物をくださったのです。「恵みの贈り物」、それはあなたに特別な霊的な賜物を与えたのです。その賜物をいただいたあなたの責任は、それをを用いて「仕える」ことなのです。奉仕をすることです。このようにして、私たちが集まった群れにおいて、あなたが奉仕をすることによって、あなたが成長するだけでなくみなも成長するからです。それが教会なのです。なぜなら、みことばがそのように教えているからです。神から特別な恵みの賜物が与えられ、それは奉仕のために与えられていると。

続いて、見てください。6節に「働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。」とあります。神が働きをなすと言うのです。つまり、神が賜物を与え、そして、神はあなたの賜物を用いて神のわざを為すのです。だから、私たちはみな教会の中であって奉仕するのです。あなたを通して神が働かれるからです。その目的は7節「しかし、みな益となるために、おのにおに御霊の現われが与えられているのです。」。あなたが神から与えられた賜物を用いて神の助けをいただきながら働いて行くときに、何が起こるのか？あなたのうちにおられる神が、あなたを通して明らかにされて行くのです。このように、みことばは私たちに、霊的な賜物がなぜ私たち一人ひとりの信仰者に与えられているのかを説明してくれています。特別な賜物があなたに与えられています。あなたの責任はそれをを用いることです。分からないときは、神があなたに重荷として与えられていることを、神の助けをもらって実践して行くことです。

どうぞ、奉仕において欲張りであってください。もっと神のために何かすることがないかと、そのようにして奉仕が生まれて来ます。しかも、正しい動機を持った奉仕です。なぜなら、感謝なことに、あなたがそのように「神さま、もっと私を使ってください。」と言う時に、あなたに力を与えてあなたを用いてくれるのは神ご自身だからです。そして、そのように用いられるあなたを通して、神はご自身の栄光を現わして行かれるのです。こんなにすばらしいことが私たちの奉仕を通してなされて行くのです。だから、私たちはみな奉仕者です。私たちみなは主に仕える「仕え人」です。私たちがなぜ神に仕えて行くのか？それは神を愛するからです。

(5) ささげもの＝Ⅱコリント8章で、パウロは私たちに面白いことを教えてくれています。マケドニアの教会のことです。彼らは非常に貧しかった。でも、その貧しさの中で彼らは喜んでささげ物をしたことが記されています。8:1-3「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思ひます。:2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。:3 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、」と、マケドニアの人たちは神の恵みを覚えたときにその神の恵みに応えたいと思ったのです。そして、彼らがしたことは、喜んでこの神にささげることでした。8節をご覧ください。「こうは言っても、私は命令するものではありません。ただ、他の人々の熱心さをもって、あなたがた自身の愛の真実を確かめたいのです。」とあります。つまり、このように喜んで犠牲的にささげるといふことは、愛の証だと言うのです。神を愛するから喜んでささげようとするのです。神を愛するから犠牲的にささげようとするのです。それは神が喜んでくださるから。なぜなら、私たち

は天に宝を積むからです。

同時に、そのように犠牲的にささげている人たちは、その行為によって「私は神さま、あなたに信頼しています」ということを証するのです。なぜでしょう？犠牲的にささげると、当然、不足が出て来ます。でも、その人たちは言うのです。「神がこの必要を満たしてください。」と。あり余っているものから神にささげないのです。喜んで犠牲的にささげたのです。神を愛するゆえに、神を信頼しているゆえに。

(6) 聖さ＝確かに、このテサロニケ人への手紙を見る時に、特に、4章3節辺りからパウロはそのことを教えます。(a)性的な罪：私たちは性的な聖さを守らなければいけないと、そのことをパウロによって教えられています。4：3に「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、」とあり、7節には「神が私たちを召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。」とあり、神は私たちが性的に聖くあるようにと願っています。(b)あらゆる罪：同時に、聖さはそれだけではありません。私たちはすべての罪から自らを守ることです。5：22に「悪はどんな悪でも避けなさい。」とあります。「これぐらいは構わない」などと決して思ってはならないと言うのです。ローマ12：2「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」もう一つ付け加えるなら、(c)罪を犯し続けている人々から距離を置く：神からそれが罪だと指摘され続けても罪を犯し続ける者たち、彼らから距離を置きなさいと言います。Iコリント5：9-13にも「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。：10それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。：11私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。：12外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。：13外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」、また、IIテサロニケ3：6にも「兄弟たちよ。主イエス・キリストの御名によって命じます。締めりのない歩み方をして私たちから受けた言い伝えに従わないでいる、すべての兄弟たちから離れていなさい。」と記されています。

C. 望みの忍耐

三つ目は「望みの忍耐」です。この「望み」とは「再臨」のことです。イエス・キリストが私たちを迎えに来てくださる再臨のことです。ある人々は、この再臨が近いという現実に対して間違った態度でそれに接しました。

1. 再臨を待望するにあたっての間違った態度

というのは、このテサロニケの人たちの中でも、特に、IIテサロニケ3：6で教えるように、彼らは「…締めりのない歩み方をして私たちから受けた言い伝えに従わないでいる、」と言います。3：11にも「ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締めりのない歩み方をしている人たちがいると聞いています。」とあり、つまり、再臨が近いということを聞いて、ある人たちは仕事も全部止めて「仕事をしても無駄でしょう、イエスさまが帰って来られるのを待ちましょう」と言って、何もしなかったのです。しかも、「おせっかいばかりして」、彼らは「自分たちがしていることが正しい」と、人々に対してそのように説得していたのです。そのようなことをしていた人たちがいたのです。それは間違っていると言うのです。

今、韓国の教会において、イエス・キリストの再臨を語るとみな異端と見なされると言います。なぜなら、1992年のことだと思いますが、韓国で人々がある教会に集まってイエスが今帰って来ると言わずずっと待っていたということがあったからです。もちろん、帰って来られなかった。そこで、イエス・キリストの再臨を語る人たちは彼らと同じだと見なされるのです。ですから、キリストの再臨を語るとみな異端だと思われるのです。悲しいことです。なぜなら、みことばはそのことを教えているからです。同時に、みことばが教えることは、その様なことをしてはいけないということです。では、どうすればいいのでしょうか？

2. 再臨を待望するにあたっての正しい態度

Iテサロニケ4：18で教えるように「こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」と、イエスがもうすぐ帰って来られるから、それをもって慰め合うのです。また、5：11にも「ですから、あなたがたは、今しているとおりに、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」とある通りです。私たちがすることは、イエスが帰って来られる日が近いから、互いの信仰が成長するように励まし合っていくことです。自分自身の信仰も成長し、みな信仰が成長するように為すべきことをしつ

りしなさいと言うのです。

「望みの忍耐」と言われていますが、この「忍耐」とは、何となく我慢しなさいということではないのです。「消極的、受動的に黙々と従うことではなく、能動的で男らしい持久力、すなわち、『受動的に苦しむ人の忍従ではなく、多分に勇敢な兵士の不屈の精神のようなもの』を意味する」（レオン・モリス）。これはある不屈の精神をもってしっかりと前を向いて歩んで行くということです。ということは、パウロが望んでいることは、イエスの再臨が近い、だから、私たちはいろんな苦しいことや問題があっても、イエスにお会いするその日が近いということ覚えて、今日をしっかりと勇敢に主のみこころを實踐して行くということです。主の再臨が近いので、より忠実に生きて行こう、ますます主の栄光を現わして行こうと、そのように願って歩んで行きなさいと言うのです。テサロニケのクリスチャンたちは、そのようにして真剣に主の再臨を待ち望みながら今日を生きたのです。

さて、今日、私たちはこのテサロニケのクリスチャンたち、神に喜ばれる生き方をしていた彼らの特徴を見て来ました。それは彼らが本当のクリスチャンであることを証しました。彼らの信仰は生きていました。どんな時にでも神に信頼を置いて生きていました。彼らの愛は生きていました。彼らはイエスが望まれた様に、また、イエスが示されたように愛を實踐し続けました。兄弟姉妹を愛しました。神を第一に愛して、神に喜んで従う者たちでした。そして、彼らは、イエスが帰って来られるその日を待望しながら、今日イエスにお会いしてもいいようにその備えをもって歩んでいました。

さて、信仰者の皆さん、あなたの歩みはこのような歩みですか？あなたはこのように歩んでおられますか？一つだけ覚えて帰ってください。これが神が望んでいることであり、この様な信仰者へと神はあなたを変えていってください、そのために必要なのは神の助けなのです。「主よ、どうぞこのような者として私は成長したいです。あなたに喜ばれる者として成長したいです。私を助けてください。あなたが教えてくださっていることを、どうぞあなたの助けによって実践させてください。私はもうこれまでのように無駄な人生を過ごしたくありません。私はこれからの日々、どれだけ残されているか分かりませんが、この短い人生、あなたに喜ばれることをして行きたいです。私を変えていってください。私を成長させてください。」と、そのようにして信仰者は歩んで来たのです。そして、そのようにして信仰者は歩んで行くのです。そのように歩みませんか？そのように生きて行きませんか？

神に喜んでいただくために。

主にお会いしたときに「良くやった。」とそのように言っていただくために。

《考えてみましょう》

1. あなたが主を、より信頼するためにはどうすれば良いでしょうか？
2. あなたは愛において成長していますか？
3. あなたが愛において成長するためには、どうすればよいと思いますか？
4. あなたは、主にお会いすることを楽しみにしていますか？
5. 再臨を待望していることを証明する生き方を挙げてください。